

---

# 殉欲のベティヘルツ

Fafunary

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

殉欲のベティヘルツ

### 【著者名】

N Z ハード

N 9 0 1 1 W

### 【あらすじ】

F a f u n a r v

今この世界に

ハッピーエンドはあり得ない。

神からの報復は突如として世界を闇に落とし込んだ。

未知のウィルスが蔓延、それにかかつたものは人間を喰らい、脳やあらゆる細胞に記載された記憶、感情、知識に基づいて体形を変えてしまう。

人々はそのものを「E」と呼んだ。

Eはいつしか、人間の一番強い感情

恐怖を軸に体を変え、異形の生命体へと変貌を遂げた。

そして、誰にもその暴走を止める事は出来なかつた。

ベティヘルツの登場までは。

## 紅の誓

神の裁きは人々を恐怖に陥れた。

「LEを視認、これより戦闘モードに移行する。」

LE

謎のウイルスに侵された、神からの刺客。  
その存在はたちまち世界に広がり、  
支配者を王座から引き摺り下ろした。  
人間はなす術無くLEに敗れ、

ついにはヨーラシア大陸の90%  
北アメリカ大陸の78%がLEによって占拠された。

俺は家族を奪われた悲しみを  
ひたすらLEにぶつけていた。

ベディヘルツのパイロットとなつて…

「コア捕捉、対象の殲滅を開始します。」

吹き荒ぶ豪雨の中

俺はマシンガンを打ち続けた。

日本の最期の砦

埼玉を守るために。

真っ赤な血液は雨に濡れる零番機の肌を滑らかに滴つた。

「四番機は後方の援護射撃に回れ？三番機は俺と組んで突撃、残りの三機は五番機の指示を仰げ？」

「了解？」

雨中でももうともせず炎を上げるバー二アの周りには蒸気がもうと立ち込めた。

それを払い、俺は足の裏に力を込めた。

ベディヘルツの足裏のホイールが火花を散らして回転し始めた時にはもう

ＬＥからの攻撃がこちらに飛んで来た。

左右に散開した俺と三番機の後ろで、触手を四番機が撃ち抜くするとＬＥは耳を割くほどの叫び声をあげて口から人間の無惨な死骸を嘔吐した。

「三番機よりコアの位置を確認しました。」

「了解、次の敵の拳動を確認後、絶対領域に侵入、コアの破壊を開始する。」

「了解。」

ＬＥが動くのはさほど遅くなかった。

伸びた触手は地を叩きながらこちらに向かつて來た。

「作戦開始。」

三番機は腰に付いたナイフ入れを開き  
「Eの脚部田掛けてそのナイフを放つた。

「Eに命中したナイフに内蔵された時限爆弾が爆発し  
脚の肉は全て剥ぎ取られ  
「Eは地に伏した。

「死ね……。」

俺は斧を「Eの「ア田掛けて振り下ろした。

一瞬も静寂と共に  
吹き上がった血液が雨と混ざり  
一帯を紅く染めた。

「A部隊、「Eの「ア破壊を確認、戦闘終了。」

「」から本部、直ちに帰投しろ。」

「了解。」

こびり付いた血の濃さほど  
この世界では勲章なのだ。  
生臭ければ生臭いほど  
それが兵士の誉となる。

俺はそれをこの身で直に感じていた。

## 紅の誓

二日後

私用で町出ると深い霧がかかつて居た。  
ここは旧西武線の駅が有つたらしいが、駅ビルもあの日のまま時が  
止まつた様に、整然と本や洋服が並び、埃を被つていた。

三階の一角が崩れ、鉄筋コンクリート剥き出しで町が見渡せた。  
各所のビルが破壊され、人間やＬＥの死体が腐臭とガスを放つてい  
る。

霧はその死体のガスと雨の影響だ。

「埼玉…か。あまりにも変わり果てたな。」

もう五年になる。

東京にＬＥが初めて出現したあの日から。

恋人の住むあの町は地獄絵図と化し

ここよりも酷いありさまだつた。

砕け散つた戦闘機や戦車の残骸

ビルのコンクリートやガラス

灰色の町に塗りたくられた血液と原型を帯びない臓物

俺が見た先に人の文明はなかつた。

有つたのは狂気に満ちた一匹の黒い巨神と燃え盛る炎だけだつた。

「春海…春海…はるみ…、くそおおおおーーー

俺は町に向かつて駆け出した。

しかし、自衛隊はそれを止めた。

「やめなさい…もうこれ以上犠牲者が出ではいけない…」

「なんでだよ…てめえら…どけよお…どけつて…畜生、

どいてくれ！！

「この町に生存者はいなつ！！立ち去りなさい！！」

「いやだ！！いやだあ…春海…。」

もうその場所にすら行く事が出来ない。

日本は北海道の一部、埼玉、岐阜、京都、大分以外全てＬＥの領地へと変わってしまった。

安全なこの場所から一歩でも出ようモノなら、すぐにＬＥの餌食になる。

「大場隊長、ＬＥの出現予測が書き換えられました。

一時間後までにベデイヘルツ零番機に搭乗、待機に入つてください。

「了解。」

俺は直ぐに本部に戻った。

やけにＬＥの出現率が上がつて居るのが目に見えてわかる。

すでに中国は壊滅、国民すら居無くなつていてる。

ヨーロッパ、北アメリカは一進一退の攻防戦が繰り広げられて居るらしい。

ベデイヘルツはＬＥに対し最も有益な武器だつた。

元々、軍用に開発されていたらしいが、ＬＥ襲撃の時、存外役に立つたため今ではベデイヘルツを中心とする軍備が形成されて行つた。そのため、生き残つた人間からベデイヘルツを操縦出来る者を集つた。

俺もその一人だ。

ＬＥを殺すため、日々皆戦闘に明け暮れた。

一人、また一人とパイロットは消えて行つた。

その度LEの学習能力は増強され  
ついには生半可なベデイヘルツパイロットは太刀打ち出来なくなつた。

群馬が墮ち、山梨が墮ち、そして千葉が墮ち、埼玉に政府が移つた  
時にはもう最初の一割以下のパイロットしか居なくなつていた。  
ろくに機能しない政府を守ると言うのは大義名分であり役人の盾に  
なるだけだった。

しかし、それは逆に高額の収入を得るチャンスだった。

俺は零番機のコックピットハッチを開き、イスに座るとIDの入力  
が要求される。

「大場賢治、入りました。」

素早くIDを打ち込む。

「大場機甲兵長のID認証を確認。」

IDが承認されるとメインコンピュータが立ち上がり、ウィンドウ  
に機体の情報が映る。

「システムオールクリア、ベデイヘルツ零番機、発進シークエンス  
に移行します。」

「了解、零番機、発進シークエンスにて待機。」

生体キーである左手をウィンドウに翳すと動力源が立ち上がつた。  
薄暗いコックピットにはサブウィンドウにブリーフィングの映像が  
流れ、今日の作戦についての情報が提示される。

「ソレイユが一体だな…。」

「お待たせ隊長さん！！」

サブウインドウが増え、芝浦の顔が映る。

「なんだ、早くその口癖が直る様に行動を迅速にすべきだぞ芝浦工

大上等機甲兵。」

「つたーーー！御硬いな大場ぢゃんよつーーー！」

「まつたく…あり得ないな、お前が副隊長だなんて。」

「戦術と戦績に着いて来た結果だぜーーー！お前もうかうかしてらんな  
いぞー。」

「遅刻野郎は上等機甲兵留まりだつ。普通ないだろ副隊長が遅刻だ

なんてーーー！」

「声荒げるなつてよ…。ほいほい、頑張つてみますよーう。」

「それでいい。」

俺は回線を切る。

するとカタパルトが動いて輸送機に格納庫される。

「よし、行くぞ…。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9011w/>

---

殉欲のベディヘルツ

2011年11月29日19時48分発行